白梅子育て広場と学生の地域意識

白梅学園短期大学保育科
教授　瀧口　優

はじめに

高校の英語科の教員として25年経験し、白梅学園短期大学で12年目をむかえている。担当教科や専門からすれば、子育て広場にかかわり地域の問題を考えるにはやや距離がある。それが２００４年から白梅子育て広場の立ち上げに加わり、今年は７年目を向かえている。なぜ私が地域に拘るのか、それには２つの背景がある。

まず第一に大学時代に学生セツルメント運動に参加して４年間を過ごしたことである。学生セツルメント運動は、戦前の地域セツルメント運動の精神を受け継ぎ、学生が地域に関わることで子どもや地域、あるいは社会を学んで改善していく手立てを考えてきた。そこで身についた子ども観はその後の教師生活に大きな力となっている。

第二の背景として、高校教師25年間の間に、担任や生活指導、生徒会などの活動を通して、地域や家庭と結びつくことの重要性を肌で感じてきたことである。何かあれば地域に出かけていき、家庭訪問などを通して家庭や地域の様々な問題に対処してきた経験を持っている。非行問題や不登校、発達や学力

問題など、高校全入の状態を踏まえてあらゆる課題に対応しなければならなかった。また地元の川口市において子育てネットワーク作りをすすめ、安行・戸塚地域において定例の集まりを持って地域づくりを行ってきたこともある。その延長として１９９９年より川口地域において「川口西口不登校親の会」を主催し10年が経過した。

こうした背景があって、白梅として地域に関わる子育て広場のスタートに関わってきた。この７年間に白梅の子育て広場は小平の地域を中心に知られるようになり、様々な取り組みへの地域の人々の参加は延べ１万人を越えている。今回「地域と子ども学」において、この子育て広場の状況とその中での学生の地域への意識を確認できたらと思う。

１．白梅子育て広場の歴史

白梅子育て広場の草創時については「大学での『世代間交流広場』の実践」（金田他２００５）において、附属白梅幼稚園とのかかわりの中から地域の親子に声をかける形でスタートしたことが書かれている。そして７つの広場（親子が学生と一緒に楽しくあそぶ「あそぼうかい」、子どもから高齢者までが一緒に楽しむ「世代間交流」、子どもの日々の発達を確認しながら学生が学ぶ「紅茶の会」、地域の子育てＮＰＯ法人が開く「きらら in 白梅」、幼稚園の園庭開放を踏まえた「ひよこの会」、特別な支援が必要な「気になる子の広場」、そして小学生や中学生とのかかわりを持つ「子どもの広場」）が組織され、教員がそれぞれの広場の運営に深く関わってすすめて来たのが最初の数年である。

学生たちが自分達の活動として意識するようになったのは、２００６年に文部科学省に申請した「特色ある大学教育支援プログラム（特色ＧＰ）」において「子育て広場を介し地域と学生を繋ぐ短大教育（子育て広場ＧＰ）」が採択され、３年間ではあるが指導員（５人）を配置して、地域と学生をつなぐことが積極的に取り組まれるようになったことからである。

子育て広場ＧＰにおいては教員が責任を持ちつつも、日常的な活動については学生が主体的に関わることが求められ、その年度の最後に学生が中心になってシンポジウムを行うことをきっかけに「子育て広場学生ＧＰ委員会（以下「学生ＧＰ委員会」）をスタートさせた。その学生ＧＰ委員会の代表と教員、及び企画調整室の職員、更には指導員が参加して拡大ＧＰ委員会を定期的に開催し（ほぼ月に１回）連絡調整を行ってきた。

２００６年からスタートした特色ＧＰは２００８年度で終了し、指導員は配置されなくなり、学生と担当教職員によって以後の運営が行われている。幸いにも他のＧＰと合わせる形で子育て広場ＧＰの活動拠点が確保され、「教育・福祉研究センター」の研究費の一部を子育て広場の研究対象ということで支給してもらうことになり、学園からの財政的なバックアップも行われている。

２．子育て広場が引き出す学生の地域への視点

本節では「白梅学園大学・白梅学園短期大学子育て広場ハンドブック」（２００９）及び「報告書」（２００９）をもとにして、子育て広場が学生をどのようにして地域へ導いていったのかに触れ、学生の地域への視点を検証したいと思う。

ＧＰに採択された１年目の２００６年は、行事などで地域への声賭けや呼びかけはできたものの、地域への視点を持つには距離があった。それは学生が地域に足を踏み出すという点が弱かったからである。「あそぼうかい」などの宣伝は幼稚園経由や郵送、あるいは小平市内の公民館などへの配布を通して広がっていったが、それらの活動は主に指導員や教職員の仕事であった。学生が地域に目を向けるために何をすればよいか。それが行事の宣伝を兼ねてチラシを近隣の家庭に「ポスティング」する活動であった。設立当初からそのアイディアはあったが、具体化したのは学生がある程度集まるようになってからである。これは私の高校教員時代の経験が生きた提案でもあった。今ではほとんどの取り組みに於いてこの「ポスティング」が行われ、そのチラシを見て参加するという状況も生まれている。

学生が地域へ視点を向けるポイントの２つ目として、学生がボランティアなどで地域に出かけていくことである。幼稚園や保育園、小学校あるいは特別支援学校、公民館など様々なところが人を求めており、こうした要請に積極的にこたえていくことである。この取り組みについては指導員が積極的に対応し、新しい活動なども多面的に学生に紹介されていった。地域に出かけていくことで人と知り合いになり、「顔の見える地域」「顔の見える大学」としてつながりを作っていったことである。行政の場合は数年で人が代わって行くので、「顔の見える」関係を維持するのは大変であるが、日常的なつながりがこうした課題を克服することにつながっていく。

３つ目のポイントは地域の人を大学に招き、学生の取り組みに参加してもらうことである。毎年開催

しているシンポジウムには小平市の社会福祉協議会の事務局や小平第六小学校の代表、あるいはＮＰＯや保護者の参加や発言があり、こうした地域の発言を通して学生たちが地域に結びついて行くことを励ましてくれている。

第４のポイントとして、子育てひろばで活動した学生が卒業先でそれぞれ力を発揮すると同時に、卒業後も子育てひろばの学生たちとつながり、地域とのつながりをより豊かにすすめているということがある。

３．子育て広場がつくる学生と地域との交流

２００８年度までの学生ＧＰ委員会の活動を通してできてきた地域への視点は、地域との具体的な交流をつくっていくことにつながっている。前述した小平市内の小学校や高齢者施設などが実施している行事に学生が出かけて行き、ボランティアなどを通して様々な交流を作りつつある。ただし学生は年数が限られており、一時的に参加はできても、それを継続して行うことは不可能で、四年制大学としても積極的に中心的に活動できるのはせいぜい２年間（短期大学の場合は１年間）である。こうした限られた条件の中で学生たちは一体どの様に地域との交流をすすめ、どのように受け止めているのだろうか。「子育て広場ハンドブック」（２００９）の声等から拾ってみたい。

２００８年度のＧＰ学生委員長（井上）は「子どもの周囲にいる大人への支援を行うことが子どもへの支援につながるということを学びました。」とまとめ、２００７年度のＧＰ学生委員長（小川）は「子育て支援を考えることは、その背景にある地域を考えることにつながります。…色々な出会いや、人々の笑顔など、結果として得ることのできる充実感は私たちにとって何事にも代えがたいものです」と感じている。世代間交流広場を体験した学生（手塚）は「様々な世代の人が集まる広場の大切さ、そして、参加者をつなぐ学生の役割を実感しました」と結んでいる。

また地域の側からは「学生たちが毎回参加してくれることで、小さい子を持つ親子はもちろんのこと、学生そして私たち広場を運営する地域の人間に、大事な時間をくれています」（奥野宏子：きらin白梅）、「今子育てや介護をめぐって地域の果たす役割が問われているとき、子育て広場のような活動が活発に行われ、地域に積極的に足を運んでくれる学生さんが増えることを期待しています」（鈴

木和代：小平高齢クラブ）と学生の活動を評価する声が寄せられている。

こうしたことばから、学生が地域への意識を高めつつあることがうかがえる。

4．学生の地域づくりを視野に入れた子育て広場の課題

最後に子育て広場への参加を通して学生たちが育っていることを、どのようにして地域に還元していくのか、それを提示したい。

地域に声をかけ、大学に招いて交流を深め、顔が見える交流から地域に出かけていって交流をすすめるというところまでたどり着いた。その他の学生の状況からすれば十分に地域や社会に貢献していると言えるが、彼らの力からすればまだまだ十分とは言いがたい。今後地域づくりをテーマに掲げて活動を進める場合、どのような課題があるのだろうか。

先ず第一に、今後は地域づくりを視野に入れた子育て広場活動を展開することが求められる。そのためにはもっと積極的な学習が必要であろう。なぜいま地域づくりをしなければならないのか、地域づくりをすることがどのような結果をもたらすのか、そうした問いに対して確信を与えることになる。またもっと地域を知ること、どこにどんな人が住んでいてどんな活動をしているかをつかむことである。

高度経済成長がすすむ１９６０年代以降、地域はコミュニティーとしての機能を急速に奪われ、21世紀には解体に近い状況がうまれている。そのことが人間に対する信頼そのものを失わせている。今こそ地域を再構築していかなければならない時期に日本は陥っているが、子育てひろばの活動が新たな地域コミュニティーづくりの一環となるであろう。

第二として、学内において学生が地域づくりを進めることをバックアップする体制が求められる。本来は大学として地域貢献を考え、学生に対しても様々な援助をしなければならない立場である。前述のように昨年度より、子育て広場学生ＧＰ委員会が教育・福祉研究センターの一環として位置づけられ、担当教員を置きながらも自律的に活動する基盤ができつつある。大学として又学園として地域にどの様にかかわっていくのか、どのように貢献していくのか、どこを地域として考えるのか、しっかりとした見通しを持たない限り、学生の地域への視点、関わりは進まないであろう。

第三として、学生と教職員のパートナーシップである。学生が主体的に子育てひろばに関わり、自覚的に参加するためには、学生が学園から任されてい

るという信頼感が必要である。学生自身の責任ある行動も求められるが、多少の失敗をカバーするという教職員側の度量も必要である。

学生は常に入れ替わっていく。昨年度うまくいったからといって次の年に無条件で進むというわけにはいかない。それらを調整する教職員の働きがますます重要になってきている。多くの教職員がかかわることによって学生の幅も質も広がっていくことになるであろう。

〔参考文献〕

・金田利子・山路憲夫・瀧口眞央　２００５　大学での『世代間交流広場』の実践
白梅学園大学　短期大学教育・福祉研究センター研究年報　No.10

・白梅子育て広場ＧＰ委員会及び企画調整部　白梅学園大学・白梅学園短期大学子育て広場ハンドブック　２００９

・白梅学園短期大学・白梅学園大学子育て広場ＧＰ委員会　２００９　大学における地域と学生をつなぐ子育て広場報告書

・日本子ども資料年鑑２０１０　日本子ども家庭総合研究所　ＫＴＣ中央出版　２０１０